

空虚感と生きる意味に対する他者存在の関与について

船尾 日出志 ・ 澤 たか子^(註)
(哲学教室)

Über die Teilnahme anderen Seins an dem existentiellen Vakuum und der Sinnlosigkeit des Lebens

Hideshi FUNAO ・ Takako SAWA
(Lehrstuhl für Philosophie)

1. はじめに

我々人間は、生きている限りにおいて、常に、空虚感を抱く可能性をもっている。空虚感とは、Frankl⁽¹⁾によると、自らの存在の意味、つまり、自分の人生に対して価値を見出すことができないときに生じる感情である。このような、人生に疑問をもつ事象に対して、澤⁽¹⁴⁾は、それ自体、既に、死を想定しているのだと考え、しかも、想定される死が、生々しい形での死と加工された形での死という2つの形態があるとした。この場合、空虚感を抱く根底に、常に、死が存在するとしても、空虚感を抱くに対して直接的に想定されるのは、前者においては死であり、後者においては生ということになる。

さて、ここで述べられた死は、自らをめぐる死に限られているが、しかし、空虚感を語る際、また、生きる意味を語る際には、他者存在に対する何らかの認識が、抱かれる空虚感や生きる意味に対して関与することが観察される。つまり、空虚感や生きる意味を伝達する場合にそれを語る際に対峙する他者存在や語る側の潜在的意図がそれに影響したり、また、そもそも空虚感や生きる意味を抱く場合に、他者存在がそれに影響することが観察されるわけである。

そこで、本論文では、空虚感と生きる意味に対する他者存在の関与について明らかにしていきたい。この目的に対して、Frankl が述べた人間の精神性と他者存在についての考察、および、生きる意味を喪失した状態で精神科を受診した患者の事例を参考資料として用いることにする。ただし、Frankl の精神性と他者存在に関する考えについては、Beda Wicki の⁽¹⁵⁾の「Viktor E. Frankl の実存分析」を参考資料とする。ここでは、その第2部第1章「人間に関する Frankl の理解：精神性に恵まれる人間の本質」(Frankl's Verstandnis des Menschen : Ein Geistbegabtes Wesen) の抄訳を以下で紹介する。なお、Wicki の Frankl 論の批判的考察については別の機会に行う予定である。

(注：名古屋大学医学部精神医学教室)

2. 空虚感や生きる意味に対する他者存在に関する事例

初診時21歳の女性。得体の知れない不安があるために日常生活がうまくいかないという主訴で、大学学生相談室を経て、精神科を受診した。

同胞2人の第1子で、父、母と同居。妹は地方の大学にて下宿している。

幼少時は天真爛漫で楽天的であった。中学生の頃からエロスとロマンを含んだ内的世界が見えるようになり、美と死を直接的に体験するようになった。高校時代、ある心的外傷体験を機に、2年間、死がとりついたような感覚に囚われ、無気力になっていた。このとき、感情は昏迷していたものの、これが普通ではない状態であること、虚構であることは認識していた。昏迷した状態から回復した後も、魂が死んだまま虚構の世界にただらと生きている感じをもっていた。それと同時に、昏迷していた時間を解明し、体系化するために、哲学的思索の森に入り込み、具体性のない観念のみによって自己の体験を表現するようになった。過去に囚われ、同時に未来という時間を想定することが不可能になり、また、過去が増すという理由で、現在の時間が経過することに脅威を感じるようにもなった。

以下において、空虚感、生きる意味、他者存在に関することとして述べられた言葉を示す。

6年前に辛いことがあって、今でも暗闇に飲み込まれたときの感覚がふっと出てきて、脅威を感じるんです。飲み込まれると自我が保てない感覚があるんです。それが、世界の崩壊感につながるんです。それは、自分の知らない間になっていって、後で気づいて、自分の精神がこんなに歪んでたのかって思うんです。私は、暗闇に飲み込まれると、焦って、身辺整理を始めるんです。暗闇に飲み込まれると、未来がなくて、死しかないんです。6年前から精神が病んでいて、治ったことがなかったんです。だから、信じられなくなる。全

てが信じられない。人も信じられないし、自分の未来も信じられない。でも、これではいけないと思って、自分の生きる意味とか考えたんです。考えて、生きる意味は分かったんですけど、でも、実感がありません。実感として感じられないんです。

3. Wicki の「人間に関する Frankl の理解：精神性に恵まれる人間の本质」についての考察「精神それ自体」から

以下において、我々は、Frankl について考えよう。彼にとっては、とりわけ、人間が精神性に恵まれているということに、特に考慮することによって、人間を全体として把握すること、そして、そのことから人間にとって生ずる様々な可能性を解明するということが重要な問題である。我々は、一体、Frankl がどの様なところから人間を精神性に恵まれる本質として考えるようになったのかという疑問から、我々の研究を始める。次に、我々が問わねばならないのが、精神とは、ただ身体と心理を通してのみ有効であり得るものにも拘わらず、Frankl が「精神それ自体を」どう理解したのかということである。精神の概念について解明されたことを用いて、我々は、さらなる疑問、特に、人間存在における精神の顕在化に関する疑問の検討のための前提条件を生み出している。

精神それ自体

1) 精神の実際についての仮定

Frankl における人類学の出発点は、Scheler (M. Scheler 1874-1928) によって記述された能力である。それは、人間だけに特有である。つまり、自分自身から、そして、周囲の世界から距離をおく能力である。Scheler の言葉によると、それは、人生に向き合い、そして、人生のために楽しみを断つことができる能力である。Frankl⁽⁶⁾はそれに対して以下のように記述している。「人間は、自己を反省する能力を持ち、そして、自己を拒絶する能力すら持つ存在である。人間は、自分自身への判断者、つまり、自分自身の要求に対する判断者であり得る。手短かに言うと、【お互い】や、自己意識や、意識と結びついた特に人間的な現象は、我々が、人間を、自らから自らを引き離す能力があり、生物学的・心理学的なもの【水準】から、離脱する能力があり、精神論の【空間】に入る能力がある存在であるとみなさない限り、それは理解できないと思われる。」人間を特徴づける審級 (Instanz)、もしくは次元 (Dimension) は (Frankl は当初は審級と言ひ、後に次元と言うようになった)、それを通して、人間が精神物理学と隔たりをもつことができるものの、それは、何らかの精神物理学的なものではない。このもう一方を、Frankl は、人間の「精神的なもの (Geistige)」もしくは「人格 (Personalität)」と名づけた。

自分自身の精神物理学的实际を認識し、自分自身の考察の対象とする人間の能力によって、人間の中に、「精神的な存在と精神物理学的事実性との間の、任意の対立関係を基礎づける」⁽¹⁰⁾溝が生ずる。この対立関係は、人間に、自分自身の立場と対峙し、自分自身に対して立場をとり、そして、自分の中の心理的なものから距離をおく能力を与える。Frankl は、苦痛に耐えることができるようにと、強制収容所にいるとき、この能力を用いた。精神の力は、人間が、自分自身の精神物理学的事実性から距離をとることを可能にするだけでなく、人間がその中で存在する状況からもまた、距離をとることを可能にするのである。つまり、「精神は、本質的に、状況に吸収されることは決してないのであり、むしろ、精神は、いつも——状況に吸収される代わりに——状況から「離れる」、つまり、距離を保ち、間隔をとり、状況に対して立場をとることができるのである。」従って、人間と、人間が生きている世界との間にもまた溝が存在することになる。「人間は…距離をとることによって、人間は、世界の中に影響を及ぼすような客観的世界と、自分が主体として対決しているのが分かっているのである。」⁽¹²⁾

人間が距離をおいて、自分自身および世界に対することができるということは、人間にユーモアの能力を与えるのである。つまり、「しかしながら、この資質(すなわち、距離をおくこと)は、人間が英雄的に立派に克己することを可能にするだけでなく、皮肉っぽい仕方ですらを扱う活力を与えもするのである。事実、ユーモアは、明確に人間的な現象および資質の範疇に属するのである。結局、どんな野獣も、笑う能力はないのである。」⁽⁵⁾

さて、どこに精神の本質が存在しているのかという疑問が生じる。我々が Frankl において見出す解答は、Scheler の考えによって強い影響を受けていることが明らかになるだろう。

2) 精神の本質規定

人間にはいかなる状況にも吸収される必要がなく、むしろ、いつも、状況を越えていることが可能であるという事実は、人間が状況に自身を組み入れ、責任をもって関与し、総じて、まず、入り込み、そして、状況を可能性の観点の下で観察し、理想を考慮に入れて構成するという、人間の能力にとっての絶対的な前提条件である。距離をおくことと献身的になることが共に作用することによって、人間には、自分の欲望を度外視し、ある事柄への奉仕をすることが可能になる。

この、ただ人間のみならず、ある事柄に関する絶対的な献身への能力は、Frankl⁽¹⁰⁾による次のような、精神についての定義に対してのきっかけを提供する。つまり、「精神的な存在者は実際には他者の【もとにいる】。これが我々のテーゼである。しかし、この【実際】

は、まさに存在的 (ontisch) ではなく、存在論的 (ontologisch) な実際である。それゆえ精神的存在者は空間的に他者のもとにいるのではない。それゆえ、我々は、いつも使われている様々な表現の空間化する性格に不満を持つ十分な権利を持っている。しかしながら、もし我々が、その『外部に一外に一そばに』を具象的、比喩的にのみ考え、そして、その具象性を意識しているならば、我々は、我々の存在論的な陳述においてそれほど誤らない。それゆえ、存在的な意味において、精神はいつの日か外にあるのではない。むしろ、存在論の意味において、精神は、その都度、いわば、外にあるわけである。存在的、空間的には、精神は決して外にあるわけではないが、存在論的には、精神は前からすでに外にある。』しかしながら、精神的存在者は、もっぱら他者のもとにいただけではない。「かえって、精神的存在者にとって、特に対等に存在するもの、すなわち、そちらの方でも精神的である存在者、それゆえ、ちょうど同じような存在者の『もとにいる』ことも可能である。他の精神的存在者のもとの精神的存在者の同席 (Beisein), つまり、それぞれが精神的存在者である両者の関係を、我々は、同伴 (Bei-einander-sein) と名づける。そして、そのような同伴においてはじめて、そして、そこでのみ、それゆえ、対等に存在する者のもとのみ、十分な同席が可能になることが明らかとなっている。」この「同伴」を、Frankl は、愛とも名づけた。我々は、この愛についての言い換えを、彼がこれまでに行った他の陳述と比較することによって、この同席ということは何が考えられているのかについて説明することができる。Frankl にとっては、愛は、また、人間を、そのように存在し、存在でき、存在すべきことに関する (他の全ての個人に対する) 絶対的な特異性において把握し、かつ、是認するということを意味している。そのことから、我々には「同席」が、いつも、認識と個人的な立場を同時に含んでいるということが推測できる。

Frankl は、「同席」という概念に対する同義語として、しばしば、「志向性 (Intentionalität)」という概念を用いている。それは、Brentano (F. Brentano, 1838-1917) と Scheler を参考にした概念である。精神的存在者は、いつも志向的である。

この、精神的なもの一般的な規定に関連して、我々は、それと関連のある、若干の本質的な特徴を挙げることにする。

① 精神的なものは永遠である。それは、Scheler の場合のように、純粋な実行中の実際であり、純粋な現実であるが、決して事実ではない。つまり、「すでに、それゆえに、精神的存在者は、本来、自分自身によって志向されることは決してできず、むしろ、精神的存在者は、自分自身によって志向されて、本来的なものとしてそれ自身超越的であればならない。精神的な

自己実行、つまり、精神的な行為の実行は『実行中の実際』として、例えば映画のコマ送りが観衆によってほとんど見られることがあり得ないように、自分自身によってほとんど把握され得ないのである。』精神的なものの実行中の実際は、Frankl⁽¹⁰⁾の「精神的無意識」という概念の意義の基礎をなしている。

② 精神的存在者は、それ自身超越的であるので、それは自分自身を志向することはできない。それを、Scheler によって「行為と人格の対象化不能性」として書き換えられた。しかるに、精神的存在者は、必然的に自分自身の外にある客体に関係づけられる。精神的なものが志向する対象は、総じてロゴスを成している意味と価値である。」「そして、ロゴスは、人間存在と呼ばれる主観的現象との客観的な関係である。」Frankl⁽⁴⁾は、ロゴスを、客観的精神的なものとも名づけ、そして、それを人間の主観的精神的なものから切り離れた。客観的な価値世界に精神的なものに向けることは、Frankl をして、人間存在についての研究に補足して、ロゴスとの対決をさせることになった。それでもって、Frankl⁽⁹⁾は、実存哲学の主観主義的な一面性を訂正しようとした。

③ 主観的精神的なものとロゴスとの間には、相互要求の関係がある。つまり、「ある事物は、精神的存在者を花嫁のようにじっと待っている。その精神的存在、つまり、その全精神性は、まさに、その事物に『おいて存在』できるという点にある。その際、その同席、それゆえ認識は、同じく次の点で、ロゴスに頼らざるを得ない。つまり、後者 (ロゴス) のみが、精神的存在者に事物をようやく『教示』するという点で。」この「教示」は、ロゴスが精神的存在者にとって何の努力もなく明らかになると誤解されるべきではない。つまり、「存在は、ようやく私がそれに立ち向かい、そして没頭して初めて顕在化するのである。」この没頭は、場合によっては、自制を前提としている。

④ 精神的なものは、その本質からして、自分自身の外にある何らかのものに対して向けられるために、精神的存在者は、同席の中で満たされる。Frankl⁽¹⁰⁾は、「精神的存在者とは…それが、他の存在者の『もとにいる』ことによって——それが他の存在者を意識していることによって『自己のもとに』ある。」と述べている。

⑤ 我々は、すでに、同席が、いつも、認識と決断を含んでいるということを言及している。つまり、同席は、認識において汲み尽くされるものではなく、むしろ、愛と憎しみの中で、最も明瞭に明らかとなるように、認識的な態度決定の中で初めて、汲み尽くされるのである。我々は、次の理由で、この考えをととても強く強調するのである。つまり、精神的なものの決断的な性格が、Frankl⁽⁹⁾にとって、とても重要なアスペクトだからである。彼によれば、決断において、精神的

なものそれ自体が構成され、そして、そのさらなる作用の中で、人間がその全体性において構成されるのである。Franklはこの点に関して、Jaspers(K. Jaspers, 1883-1969)を引き合いに出している。Jaspersは、人間という「決断する存在」について述べた。そのことは、Franklの理論が、人間の素描において、決断に、ただ付け足しの役割しか与えない Schelerの理論よりも、より強く実存主義的に刻印されていることの例である。

⑥ 決断する存在として、精神的なものは、人間の中の自由である。つまり、「我々は、最初から、総じて、ただ、どのような事情においても、また、いつも、自由に行動し得るものだけを『人格』と名づける。」と述べている。Frankl⁽¹⁰⁾は強調していることだが、精神物理的なものや、より外的な実際に反対することも、自由な行動に属しているのである。Franklは「精神的な人格は、人間の中の、いつでも、常に、反対することのできるものである。」と確認している。

⑦ 決断する存在、そして、自分自身を構成する存在として、精神的なものは、いかなる人間においても、類のない何かである。つまり、「この世に生まれてきた人間には誰にでも、全く新規なものが存在の中に組み込まれており、それが実際となっているのである。というのは、精神的実存は、受け継ぐことが可能ではなく、親から子へと伝えることができないのである。伝えることができるのは、ただ、礎石であって、建築士ではない。」Frankl⁽⁹⁾は、礎石をもって精神物理学的なものを、そして、建築士をもって精神的なものを考えている。その精神的なものは、同時に、精神物理学的なものと自分自身を共に構成しているのである。人格の類なさについては、我々は、すでに、Schelerにおいて見聞している。さらに、我々は、Franklよりも、Franklのごく近い友人である P. Polak⁽¹³⁾において、人間の類なさについての考えがより明確に述べられているのを知っている。つまり、「実存的であること(すなわち、精神的であること：原著者による補足)は、これに反して、本来的であるということであり、そして、人間の本来的な存在可能性(Heidegger)と、人間の一回性と類なさ(Frankl)ということを描べている。心理的であること(すなわち、拘束され、『制約』されていること)は、人間の(そのような種類の事情のせいでそのように)存在しなければならないこと—存在要求である。その存在要求に、存在当為および、そのようなものとして存在する能力としての実存が直面している。」

3) 精神的無意識

人格が、その精神的な行為に熱中し、そして、それゆえに、いかなる自己観察および他者観察をも避けるということは、これは、Schelerの現象学的な認識であ

るが、これは、Franklによって参照されているが、別の名称を与えられている。Franklは、この事柄を「精神的無意識」として特徴づけている。つまり、「しかし、それは、すでに示唆されているように、本当の深層の人格である。すなわち、精神的実存的なものは自分の深層において、常に意識されていないのである。深層の人格は、およそ単に、任意に意識されていないのではなく、むしろ、必ず意識されないのである。それは、精神的行為の実行が、それと共に精神的行為の中心としての人格の本質が、本来的に純粋な『実行の中の実際』であるということに起因するのである。つまり、人格が、自らの精神的な行為の実行中に、あまりに激しく熱中するので、人格は、自らの真の存在においては全く反省されないものであり、反省の中に人格が現れ得ることはないのである。この意味において、精神的実存は、それゆえ、本来的な自我—いわば自我それ自体は、反省し得ないものであり、それゆえに、そもそも、実行し得るだけであり、そして、ただ、自分の実行においてのみ、実行の中の実際としてのみ実存するのである。本来的な実存は、反省されないゆえに実存であり—そして、それゆえに、実存は、結局のところ、分析され得ないものである。実際のところ、我々は、まさに、実存分析の表現でもって、実存の分析をしようと思ったことは一度もなく、むしろ、実存に基づいて分析を行ったのである。」⁽¹¹⁾しかし、精神的なものごの自己反省は、不可能だけでなく、要求されることすらない。「というのは、自分自身を観察し、自分自身の姿を鏡に映すことが、精神の課題ではないからである。」⁽⁶⁾

しかし、それによって、精神的無意識の意味だけは述べられている。このように表現することによって、Franklは、全ての精神活動についての前論理的・前道徳的な「源泉と根源」をもまた述べているのである。彼は、そこにおいて、人間の決断行為の基礎になっている、もはやそれ以上に根拠づけられない最終的な理由を理解してはいない。Franklは、この関連で、Pascal(B. Pascal, 1623-1662)の「心は、理性の知らない理由をもっている。」(Frankl⁽¹¹⁾から引用)という陳述を指摘している。

この精神的無意識の本質的なアスペクトは、人間の反省的存在論的自己理解である。このことは、自身の存在についての、人間の直接解釈と関係するものである。この自己理解を、人間は、全ての回顧的な自己観察から独立的に、そして、それ以前にすでに持っている。⁽¹⁰⁾もちろん、それは、抑圧され得るものであり、イデオロギーによって歪曲され、覆われるものである。ほとんど変形されていない自己理解を、Franklは、質素で簡素な人間において見出している。つまり、人間の自己理解および現存在理解についての現象学的分析は、次のことを明らかにしている。「人間であることは、

絶え間なく様々な状況に直面しているということの意味している。それらの状況の各々は、同時に、贈り物でもあり、課題でもある。その状況が我々に課題とすることは、自己の意味の実現である。そして、それが、同時に我々に与えるものは、そのような意味実現を通して自らを実現する可能性である。あらゆる状況は、我々が聞くべきであり、我々が従うべき呼びかけである。」⁽¹¹⁾

人間は、この課題を、精神的無意識のもう一つの構成要素を成す良心を通して、認識することができる。Franklは、良心を、さながら、精神的無意識のモデルとして用いている。Franklは、それゆえ、このケースにおいて、全体的に、(精神的無意識という)部分に(良心という)模写がされると推測している。

4) 良心

Franklによれば、良心は「全ての明確な道徳に本質的に先行する前道徳的な価値理解」と同じことである。そのように理解される良心は、無意識で、非合理的である。というのは、「良心の決断は、結局のところ、究明することは不可能なのであり、いつも、ただ、後から合理化されるのみなのである。」Franklにとって、良心は事実にだけでなく、必然的に、無意識的である。「というのは、存在は意識ににとって明らかになるのだが、しかし、存在は、良心にとっては明らかにはならない。むしろ、良心にとっては、存在しないものが明らかになるからである。まだ存在しないもの、つまり、これから先に存在すべきものである。その存在すべきものは、まったく実際的なものではなく、これから先に実現されるべきものである。つまり、それは、実際的なものではなく、単に可能なものである(もちろん、その単純な可能性がより高次の意味において、他方、また、必然性を提示することなしに)。しかし、良心から我々の前に表れてくるものが、現実である限りでは、つまり、それが、実現されるべきものである限りでは、ただちに次の疑問が生じる。それは、最初に、一度、精神的に何とかして先取りされる方法による以外に、どの様にして実現されるべきなのかという疑問である。この先取り、つまり、この精神的な先取りは、今や、直感と名づけられるものの中で行われる。つまり、精神的な先取りは、展示の行為の中で生ずるのである。」良心の課題は、それゆえ、ある状況の中で行う必要のあることを明らかにすることである。その場合に、例えば、Schelerが、状況価値という概念をもって捉えようとした、具体的な状況における、具体的な人間の、一回性の類のない可能性が重要な問題となる。それゆえ、何らかの絶対的な個性、つまり、個性的な存在当為が重要な問題となる。このことは、良心と動物的本能の間の重大な相違となる動物の本能においては、常に、何か一般的なものが問題となる。良

心は、あらゆる類のない人間に対して、個人的な課題を提示する。「良心に基づく人生は、すなわち、いつも、我々の一回性の類のない人間それぞれにおいて大切なことであると考えられる、そのような具体的な状況に根ざした、絶対的に個人的な人生である。つまり、良心は、私の個人的存在の具体的な「Da」(Heideggerの使用した Dasein 概念の“Da”が念頭におかれていると思われる：澤補足)を、いつも、すでに含んでいるのである。」

しかし、そのように理解される良心に対して、幾らかの疑問が挙げられる。つまり、いつも個人的であり、そして、人間がその人の振る舞いの中で終審(letz Instanz)として支えに用いるような良心は、間違えることさえあり得ないのだろうか。どの様にして、人間が行う決断、態度、行為において、その人に道を指し示し、そのように導くような能力と力が、良心に与えられたのだろうか。良心の個性を考慮する中には、個人的な良心を引き合いに出すことで恣意的であることを正当化し、そのようにして、良心の個性を悪用する危険はないのだろうか。我々は、この脅威的な悪用を目の当たりにして、無条件に尊敬することが肝心である若干の価値、あるいは、少なくとも唯一の価値が存在しないのかどうかということを、自問しなければならない。

我々は、良心の力から始めよう。どの様にして、良心は力を持ったのだろうか。それについて、Franklは、以下のように述べている。「超自我や自我理想が、単に、自分にのみ起源をもつならば、つまり、それが、ただ、自分の手で素描された手本であるかもしれなかったり、また、何らかの方法で与えられたり、あらかじめ見出されたりしていないものならば、効果的であり得ないのである。つまり、自分の考えたことだけが問題である場合には、超自我や自我理想が効果的であることは決してないのである。」良心の力は、それゆえ、人間の外にある何らかのものにおいて根拠づけられなければならない。Franklによると、良心は、超越的なものの声であり、その限りでは、自らを超越しているのである。「良心は、そのようなものとして、心理的内在の水準から出て、その水準をまさに超越している超越的全体の内在的側面でしかない。」良心は、それゆえ、結局のところ、超越の内側に源を発するのである。

良心を通して、いつも、すでに、超越との関係が人間に内在している。この関係は、個々の人間にとって潜在し、そして、隠れたままであり得るか、もしくは、抑圧され得るものである。それが現実に生じるとき、Frankl⁽¹²⁾は「無意識の神」について語る。「今、無意識の神についての、我々の慣用語で言おうとしていることは、我々人間の側からは隠されている神に対する、人間の隠された関係ということだろう。」神に対する、

人間に内在的な関係に関する、この解釈には、彼の宗教理解が相応している。「敬虔さとは、結局のところ、そして、本質的には、おそらく、絶対と言われるものを背景にする人間の、自身の断片性や相対性の体験である。」この神との関係性についての、3つの誤解もしくは誤った推論に、ここで、確かに、注意が向けられなければならない。

① 精神的無意識が、それ自身の中に、無意識的な敬虔さを隠すという事実によって、精神的無意識そのものが神的であるということが結論されるべきではない。「というのは、我々が、神との無意識的な関係を、いつも、すでに、もっているということが、神が我々の中に存在していること、つまり、神が我々の中に無意識的に内在しており、我々の無意識を満たしているということを、意味しているわけでは決してないからである。」⁽¹¹⁾

② 人間にいつも内在している超越に対する関係が、宗教的な衝動として理解されるべきではない。その事情に対する根拠は、敬虔さの中にも、また、精神的無意識の中にもある。このことは、以下のような、Franklの陳述から明らかになる。「真の敬虔さは、衝動性という性質を持たず、むしろ、決断性をもっている。つまり、敬虔さは、その決断性をもって成り立っているものであり、その衝動性という性質を消滅させるのである。」そして、Franklは、精神的無意識に関して、以下のように記述している。「しかしながら、我々にとって、無意識的な敬虔さは、まさに、すでに、全く、一般的に、精神的無意識は、決断する無意識的存在であるが、まさしく、無意識によって駆り立てられる存在ではないのである。」

③ さらに考え得る誤った解釈に対して注意を払うことによって、同時に、良心の限界を指摘する機会が与えられることになる。すなわち、Franklは、良心を過大評価することに注意を払っているのである。つまり、もし、良心に対して唯一の神的な属性が与えられることが可能であっても、全知であることまでが与えられ得ない。良心は「人間の状態」に加わり、それゆえに、有限であり、欠点がある。つまり、「良心は、まさに、人間を惑わすこともできるのである。もっと言えば、最後の瞬間まで、つまり、息をひきとる瞬間まで、人間は、自分が本当に、人生の意味を満たしたかどうか、もしくは、ひょっとすると、ただ思い違いをしていただけだったのかどうかを知ることはないのである。」

また、良心は、人間を、結局のところ、無意識の中に放置するので、人は、いつも、危険なものとして示される。人間は、結局は良心に付随する無意識性であるにも拘わらず、その良心に従う危険をおかさなければならないのである。というのは、無意識と有限性は、人間性ととともに与えられており、そして、人間は、そ

のことを、自ら認めなければならないからである。しかし、「危険」だけでなく、「謙虚さ」もまた、その「無意識」に属しているのである。

良心に関する我々の考察を締めくくりにあたり、我々は、要約という意味で、以下に示す、良心についての、FranklとSchelerの見解に対する類似点に注意を向けよう。両者とも、良心でもって、状況に特有であり、個人に特有である価値を認めるような人間の直感的な能力を特徴づけている。両者の場合、良心は、超人間的な秩序と関連をもっているとしているが、その秩序は、誤りのなさを保証するものではない。

4. 考 察

Franklによると、人間は、本来、心理的なものと身体的なものを越えた次元にあるような、人間らしさを特徴づける精神的なものに依拠し、自分の力ではどうにもならないことがあることを認めつつもそれに拘束されずに自由でありえ、精神的な次元での使命を果たす責任を有するものである。空虚感と生きる意味についてはFrankl⁽²⁾は、自らの人生の意味が見出せず、空虚感を抱くことになるのは、そのような、本来、人間に備わっているものが十分に機能していない状態であると述べている。つまり、空虚感は、漠然とした存在の意味欠如から生じるのではなく、精神的な意味で自分の人生に対して能動的であり得ることができていないと認知するときに、そのような自分に対して空虚感を抱くことになるわけである。

この、精神的な意味で自分の人生に対して能動的であり得ることを可能にするのは、先に提示したWickiの資料によると、自らを越えて他者を志向することであった。これをFrankl⁽²⁾は「他者志向性」と呼んで、人間に特異であるとしている。ここで、空虚感を抱く状況、すなわち、生きる意味が見出せない状況における、自分と他者存在との関わりのあり方が問題となることになる。Frankl⁽²⁾は「他者志向性」を、自己の利益を越えて、他者に没頭すること自体が、結果として、主体の存在理由を証明することになるのであり、また、結果として、自らの生きる意味が見出され、満足を得ることになるとしている。ここでいう、自己の利益とは、自己に付随する諸々のものであり、そこには心理的な満足の追求や身体的な満足の追求も含まれている。一方、精神的な満足の追求とは、自己を越えて他者を志向することが含まれている。そして、生きる意味が見出されることによって自らが満たされるという体験は、あくまでも他者を志向した結果でしかあり得ず、それゆえに、満足を得ることを目的とすることで、満たされることはあり得ないということである。これらのことから、空虚感と生きる意味に対する他者存在の関与については、自己の利益を越えて他者を志向する場合には生きる意味が見出されるものの、自己の利

益のために他者を志向する場合や自閉的に他者を排斥する場合には、生きる意味が見出せず、空虚感を抱くことになるということが理解できる。これは、主体にとっての他者に対する認識のあり方が、自らの空虚感や生きる意味に関与するということを意味している。加えて、他者志向的であるということは、意識が自己に供給されない状態であり、自我から他者を志向するという方向を持つものである。それゆえに、自我の自由性、選択性が機能している状態であるともいえる。

さて、事例に関してであるが、この事例においては、空虚感、不信感、無力感が抱かれており、未来の可能性は否定され、自らの存在理由は過去の自分の状態の解明におかれている。また、意識が過去や現在の自己に向けられており、他者志向的であるとはいえない状態にある。しかし、この事例においては、前述のような、自己の利益追求のために他者志向性を拒否しているのではなく、むしろ、自分自身を守るためにそうしていると考えられる。もし、この事例が他者志向性を選択した場合、自我が他者に飲み込まれる体験、もしくは、飲み込まれる危険性が喚起されてしまうために、意識が自己を越えることが、自我にとって脅威となると考えられる。この状況では、人間に本来備わっている自由性と選択性は、自我の側にあるのではなく、むしろ、他者の側にあると認識されているとも考えられる。これは、人間の主体性を脅かすものとなる。それゆえ、自我を守るために、排他的になり、意識が自己に向かうということになると考えられるわけである。このような状況においては、他者志向的でないことに対して、他者志向的であることを勧めるよりも、むしろ、他者志向的であってもよい安全性を確立することが先になされるべきであると考えられる。つまり、意識を自己から離しても、自我機能が崩壊しない安全性と安全感を確立することが、意識を自己から離し他者へ向かわせることに先立って行われるべきだと考えられるわけである。これは、安定した自我に対する信頼感を獲得するという意味もあると考えられる。また、この事例では、実感のなさが他者に対してだけでなく自分自身に対してあり、離人感が認められる。このことは、空虚感を抱く状況においては、他者に対して親密な関わりを持ってないだけでなく、自分自身にも親密な関わりを持ち得ないということを表していると考えられる。ここには、他者に対する疎外感ばかりでなく、自分に対する疎外感、つまり、自我違和的な感覚も認められる。

以上のことから、空虚感を抱く、すなわち、生きる意味を見出せなくなる状況は、自己を越えて、他者に意識を向かわせることができないときに生じるが、その根底には、自己を越えることのできない自我の弱さがあると考えられる。つまり、空虚感は、対象関係のあり方に関わるが、その対象関係は自我の強さに関

わっていると理解できるのである。

5. おわりに

以上において、空虚感と生きる意味に対する他者存在の関与について考えてきた。ここで得られた考察は、主体が主体として存在し、そのための機能が保持されていることを前提としている。これは、Frankl⁽²⁾が述べた、人間の持つ精神的な面へと働きかけるロゴセラピーの適用は、主体に本来備わっている精神機能が妄想によって阻害される場合を除くということと同義のことである。つまり、主体が主体として機能しない自我状態である場合、自らの生きる意味に苦悩することはあり得ないということの意味する。それに対して、本論文の中で用いた事例は、主体として違和感を感じることができているのであり、それは、主体としての機能は失われていない状態であるといえる。それゆえ、自らの生きる意味に苦悩し、空虚感を抱くことが可能になるわけである。しかし、ここでは、主体が何であり、どのような機能を持つのか、また、主体が主体である状況とは何かということは明らかにされないままである。これに関しては、今後の課題としたい。

6. 文 献

- (1) Frankl, V. E.: Aertzliche Seelsorge. Franz Deuticke, Wien, 1952【死と愛——実存分析入門】フランクル著作集2 霜山徳爾訳 みすず書房 東京 1957
- (2) Frankl, V. E.: Theorie und Therapie der Neurosen. Urban & Schwartzberg, Wien, 1956【神経症II】フランクル著作集5 霜山徳爾訳 みすず書房 東京 1961
- (3) Frankl, V. E.: Basic Concepts of Logotherapy. Confinia Psychiatrica 4, 99., 1961
- (4) Frankl, V. E.: Dynamics, Existence and Values. Journal of Existential Psychiatry 1, 5., 1961
- (5) Frankl, V. E.: The Concept of Man in Logotherapy. Journal of Existentialism 6, 53., 1965
- (6) Frankl, V. E.: The Philosophical Foundations of Logotherapy. Universitas 8, 171., 1966
- (7) Frankl, V. E.: Aertzliche Seelsorge. Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse. Franz Deuticke, Wien, 1971
- (8) Frankl, V. E.: Grundriss der Existenzanalyse und Logotherapie. In: Grundzuge der Neurosenlehre, Bd. 2. Urban und Schwarzenberg, München / Berlin / Wien, 1972
- (9) Frankl, V. E.: Der Wille zum Sinn. Ausgewählte Vorträge über Logotherapie. Huber, Bern / Stuttgart / Wien, 1972
- (10) Frankl, V. E.: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie. Huber, Bern / Stuttgart / Wien, 1975
- (11) Frankl, V. E.: Der unbewusste Gott. Psychotherapie und Religion. Kosel, München 1977
- (12) Laengle, A.: Orientierung am Sinn. In: Ders. (Hg.): Wege zum Sinn. Piper, München, 1985
- (13) Polak, P.: Frankls Existenzanalyse in ihrer Bedeutung für Anthropologie und Psychotherapie. Tyrolia, Innsbruck, 1949

- (14) 澤たか子：「空虚感と、空虚感に対して想定する生と死についての考察」哲学と教育，45， 1-17
- (15) Wicki, B.: Die Existenzanalyse von Viktor E. Frankl —

als Beitrag zu einer anthropologisch fundierten Pädagogik.
Paul Haupt, Bern, 1991 P82-P92

(平成10年 9 月 9 日受理)